

エピソード78

「もう、この子の育て方がわからない」と保護者から相談されました

このエピソードでは、教職経験5年目、20代男性の先生の経験を紹介します。



ジュリさん
教師を目指して勉強中



先生は、特別支援学級を担任していらっしゃるんですね。

はい、私が教師になって3年目に経験したことをお話します。ようやく仕事も覚えて少し自信のついてきたころでした。その時に担任したのが美玖さんです。

美玖さんは、とても明るく学級のムードメーカーのような子でした。半年くらい経ったころ、突然、保護者から「もう、この子の育て方が分からない」と相談を受けました。

話を聞いてみると、家での約束を一切守れず、自分の好きなことしかしない、夜も寝ないでゲームばかり、食事を作っても食べずにお菓子ばかり食べている。保護者が、強く言うと癇癪を起して暴れる、自分のできることはもうない。とのことでした。



それまでは、普通に生活していると思っていただけに、自分が気づけなかったことを強く後悔しました。

そこから、児童相談所、家庭児童相談室などと連携を諮って、ケース会議を行いながらケースワーカーや地域の相談員の力を借りながら保護者をサポートしていく体制を作っていました。そして、学校としてもできる範囲で、家庭訪問や美玖さんへの指導を継続していきました。

「おうちでの約束カード」なるものを作成して、美玖さんに、前日の家庭生活を振り返ってもらうことにしました。きちんと食事を食べたか、何時に寝たか、保護者に暴言をしなかったか、保護者をたたいたりしなかったか、などの振り返りをしながら、自分の生活を見つめ直してもらいました。



少しずつ、約束が守れるようになってきて1年が経とうとしたときに、保護者から一通の手紙をもらいました。その中には「もうダメかと思ったけど、少し希望が見えてきた」という内容が書かれていました。

そこで手紙のお返事にこう記しました「きっと、お母さんが真剣に向き合ってきたことが子供にも伝わったことで今の改善された生活があると思います。これからも、一人で悩みを抱えずに周りに悩みを吐き出してください。」

異動して、その家庭との関係は切れてしまいましたが、数年後、学校に美玖さんからの手紙が届きました。「先生、中学生になりました。毎日、楽しく学校に行っています。お母さんも元気です。」と記されていました。



ジュリさんの気づき



学校外の機関と連携して、保護者をサポートする体制づくりを、3年目の先生がされているのがすごいなと思いました。

若いから保護者とのかかわりは難しいということではないと学びました。

お・し・ま・い

若い先生の保護者支援



ジュリさん

<掲載してあるエピソードはエデュサポネットメンバーの経験をもとにした架空のエピソードです。>

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)